

# 防災研究所に26年半在職して

京都大学名誉教授 國枝治郎

昭和30年代末から40年代前半、未だ本館建物はなくて教養部時代の木造の校舎を防災研究所で使用していたころに工学部建築学科での職にあった筆者は横尾義貫教授の指示でこの木造校舎の一室を借りてシェル・空間構造の模型実験を行うため宇治キャンパスへは頻繁に来ていた。当時、木造校舎とはいえ立派なカーペットも敷かれた教員室には一部を除いて人影は全くなく、教官、職員等は本部地区の方に居られたが、新入生時1年間宇治キャンパスに学んで思い出のある建物も残り、自然の多い宇治キャンパス通いは楽しかった。

昭和48年(1973)11月工学部より地盤震害研究部門助教授に配置換えになり、宇治キャンパスに勤務地を移した。当時当部門には南井良一郎教授と3助手が在任中で、建築物の確率論的地震応答特性解明、建築物～地盤連成地震応答解析等に活発な研究活動を行って居られた。そこへ建築構造という点では繋がるが研究内容の全く異なる他研究室出身の筆者が入ることはお互いに難しいことではあったが、研究を遂行する上での物理的環境は極めて望ましいものであった。京大電算機KDC-1設置以来その使用が筆者の研究遂行上不可欠であったので、研究費に恵まれていたのか、ミニコンピュータ、Z-8クロメンコマイクロコンピュータ、スーパーミニコンピュータなどが他の研究室に先駆けて研究室に設置されつづけ、専用回線で吉田地区の大型電算機につながれることにもなって研究は捗った。だが、停年退職まで27年弱過ごした宇治キャンパスは必ずしも居心地の良い場所ではなかった。

居心地の良くなかった第一の大きな理由は防災研究所が災害因子を基に部門構成がなされている点にあった。建築物という物を造る立場から言えば、特に筆者の研究対象の特異な建築物「シェル・空間構造」では地震、風、積雪、火災といった災害因子は同等に考慮すべきもので、重力による静的荷重、膜構造における内圧などはより重要である。シェル・空間構造の一形式である膜構造の災害因子としては風問題が重要となる。配置換え当時はこれに手を付けていたが、耐風部門は別にあり、地盤震害部門に属する筆者には風問題をやっていると何かと摩擦を招く。2、3の論文を書いて撤退したのが悔やまれる。野球場を覆う屋根のような鉄骨造空間構造の弾塑性地震応答解析も他の部門との間に摩擦が生じそうで、研究では弾性域に止めて地震応答解析を進めねばならなかった。土木系、理学部系の部門では部門名をさほど重要視せず、上述のことを奇異と感じられかも知れない。だが、建築系では、防災研究所部門は工学部建築教室の強い影響力の下で、部門間の交流、意志の疎通は少なく、縦割り意識は強烈であった。その後遺症は理学系、土木系、建築系の三部門で最初出発した防災研究所が34分野・領域となった現在に建築系はそのうちの5分野、領域のみであることに見られる。それも他の系の好意で最近1領域増えてのことである。

居心地の悪かった第2の理由は防災研究所の性格にある。防災研究所は大学の付置研究所である以上、基礎学理の研究と教育(大学院)にも軸足を置かれてしかるべきだと考えるが、実状は応用研究に(端的に言えば直ちに役立つ研究に)最重点が置かれているように感じられることであった。「防災研究所」の名前のためか、行政機関や民間企業の付属研究所と変わらないような扱いで、所員は地方自治体、財団法人の各種審議会委員を多く兼務し、そのことを良しとする風潮にある。自己評価のための研究業績調査アンケートにかつてあった「テレビに幾度出たか、新聞に幾度載ったか」の項目はこの研究所の現在の性格を如実に物語っている。研究者を志してこの研究所に在籍する者には居心地の良いはずはない。研究者の公募制が採用されている現在、そして独立行政法人化後、この傾向がますます助長されないか懸念の残るところである。

防災研究所の理学系、土木系、建築系の集合体であることの良い点は、他の分野の研究者の話を公的、私的に聞かせていただける機会の多いことである。工学系の筆者にとって年次報告会で理学系の方々の研究を開けることは

非常な楽しみで、このことは筆者の数少ない居心地の良さの一つであった。

ところで、平成8年の研究所の大改組のとき、建築系には将来の研究方向を展望した何等の意見も提案も無く、流れのままに過ぎてしまったことは誠に残念であり、計画時に発言の場を有しなかった筆者は歯がゆい思いをしていた。何故なのか。民間企業では経営者の責任問題が過去にさかのぼって云々されようとしている。寄り合い所帯の防災研究所では全てが教授会のみ議決で決まる。現在および将来の研究所の不具合については、人事を含めて決定権を行使した過去の教授、名誉教授の責任の度合いは大きいと考えられる。真に研究所の将来の発展のためにはどの様な点に問題があったのかを常に明らかにし、それを決定した人々の反省と責任の追求も決して疎かにしてはならないと考える。5年間と短い期間であったがその職にあり、名誉教授の称号を受けた筆者も勿論例外ではない。

過去の年史では諸名誉教授は祝意と賛辞をのみ書かれるのが通例であるが、真に将来の防災研究所の発展を願うならば、過去を直視した辛口も必要であると考えて敢えて記す次第である。人生の最充実期の27年を過ごした防災研究所には愛着は深く、大学付置研究所としての益々の発展を願うことや切である。